

潮騒通信

潮騒ジョブトレーニングセンター

Drugs and Alcohol Addiction Rehabilitation Center

一部 100円

どっこい生きてます!

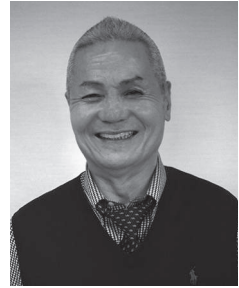


今号の表紙を飾るのは潮騒 JTC のスタッフの日常活動を支える赤服隊と青服隊の主要メンバー。赤服は主に農業隊、青服はケアの実務作業を担うスタッフらが着用し、プロジェクト会議を構成する中心メンバーです。なお、背表紙は鹿島神宮前通りのト伝にぎわい広場で開かれた街おこしイベント「三の市」での潮騒エイサー隊(男女混合)の演舞風景です(関連記事はありません)。

2018

3

新たな仲間の 学びのスタートと 私の75歳祝賀に感謝



待ちに待った春の到来です。人も自然も陽春を浴びて気分が上向き、理屈を超えて生きていることの素晴らしさを実感できる季節です。お蔭様で私も、4月には「70の手習い」で始めた夜間高校での生活が3年目に入ります。潮騒JTCにおいても教育(特に高卒の学歴)の欠落は、依存症の回復に向けてクリアすべき課題の一つです。社会参加や就労への武器になるのはもちろん、当事者には高卒の資格が大きな自信となります。嬉しい事に新年度も新たに潮騒の仲間二人が私と同じ地元の県立高校に入学し、夜間の学びをスタートさせます。私達にとっては学びたいと思った時が、遅まきながらも「15の春」の学齢タイミングです。私は自分の過去の体験から、依存症問題の取り組みには利害や垣根を超えた医療、福祉、教育、文化…のネットワークが総合力として必要だと痛感しています。なので、こうした入寮者の高校入学の動きに一定の手ごたえを感じています。

常々申し上げているように、依存症は罰を与えることでは解決できない厄介な病気です。スリッパして再び獄に繋がる悪循環から抜け出すには、魂の奥深い部分での霊的な目覚めと成長が必要です。これには施設が提供する回復のプログラムと毎日のグループミーティング、同じ体験を分かち合える仲間の存在、壁は厚いとしても地域の理解と支援が不可欠です。当事者側も甘えているだけでは回復は望めません。依存症ケアの光を当てる医療や福祉の充実に期待するだけではなく、困難にめげずに回復に向けて自助努力している姿を知ってもらう事が必要です。「まず隗より始めよ」ではありませんが、みんなの手本になればと始めた私の高校入学のチャレンジが少しずつ仲間のヤル気を刺激し、自分も勉強したいという新たな学びの仲間入りの動きに繋がっているようです。

さて前号でも報じましたが、私にとって節目となる75歳の誕生祝いイベント(2月25日)は予想を超える皆様の参加を頂き、有難うございました。改めて私は、つくづく出会いに恵まれたなあとの思いを強くしました。最後のお礼挨拶では娘達二人が登壇してくれ、二人には無理強いだったかもしれませんが、こんな出来の悪い私を「お父さん」と呼んでくれました。まだまだ私にとっては過去の「埋め合わせ」の取り組みは始まったばかりですが、生涯忘れられない感動場面となりました。私達アディクトにとって「埋め合わせ」は、過去の迷惑を掛けた人々に対する「贖罪」という後ろ向きの態度ではありません。依存症という生涯治療における自分の回復に必要不可欠な、大事な前向きな取り組みなのです。私達の精神が鋼(はがね)のように叩いて鍛えられるならいいのですが、そうはいきません。心の部分にダイレクトに関わるだけに依存症はプレッシャーに弱いナイーブな側面を持っています。なので、贖罪という負い目ばかり囚われすぎると、これが重圧になりスリップの引き金となります。大事なことは常に謙虚になって無力な自分に向き合い、他ならない自分のために回復の歩み続けることです。このように私達にとって「埋め合わせ」活動とは、いい意味での自己中心的な生涯を構築する作業だと言えるでしょう。

(センター長 栗原 豊)



今回から不定期で潮騒家族会に参加している家族からのメッセージをお届けします。我が子が依存症に陥る背後には家庭内に問題がある場合が多いとされます。当人は施設で、家族は家族会でそれぞれ自分達の問題と向き合い、回復に向けた歩みが必要です。



娘にとっての仲間は 私ども夫婦にとっての家族会

私ども夫婦が潮騒ジョブトレーニングセンターの家族会に出合うことになった経緯からお話します。三年前のある朝早くに、私共は娘家族の住むアパートに着きました。目の前で娘が逮捕されたのはほんの数時間後の事です。その時やっと「この娘は尋常ではない。病気なのだ」と確信しましたが、アディクトについては無知でしたから、判決日までの4か月間は次から次へと明らかになる娘の行状にうろたえ、留置所での言動に振り回され、何も気づいてやれぬ上に病気の協力者にもなっていた自責の思いもあって、すっかり気力も自信のかけらもなくしかけておりました。その上判決後の娘の落ち着き先も決まらず、途方に暮れていたのです。

ですから奇跡的な出会いで、判決日釈放後から潮騒ジョブトレーニングセンター女性ハウス「るみの家」に入寮できたのは私共親子にとってとても幸運なことでした。まず私ども夫婦は娘と直接的な距離を置けたことで、少しずつ冷静さを取り戻すことが出来ましたし、家族会の存在を知り参加するようになりました。娘も施設長ルミさんを始めとするお仲間の中でやっと癒され、自分の病

気を受け入れ始め、ステップアップとスリップを何度も繰り返しながらも、その度にお仲間から愛され、許され、時に叱咤され励まされて、最近では入寮した頃と見比べると体力も回復し、優しい目のいい笑顔を見せてくれるようになりました。こうして揺れながらも、お仲間と共に娘なりのペースで回復していくのだらうと思い、見守っているところです。娘にとってのお仲間が私ども夫婦にとっての家族会だと感じています。

潮騒ジョブトレーニングセンター家族会は自由で穏やかな会です。アディクト家族が抱える問題を解決する特効薬のような答えが用意されていたわけではありませんが、回を重ねて参加するうちに、不安、後ろめたさ、後悔などから少しずつ解放され、現実を受け入れ、これから先のことを考えるようになりました。栗原センター長の愛あるほどのビジョンの話や、途中から参加して伝えてくれる入寮者のメッセージ、家族会員の何げない言葉に私ども夫婦は慰められ、励まされて、希望も生まれ、多くの事を気づかせて頂きました。参加当初は娘のためになることを急いで学ばねばと気負った思いもありましたが、今は私ども夫婦が仲良く元気で落ち着いた日常を送ることが娘への唯一のサポートになるだろうと考えています。ですからこれからも「癒し処?!!」家族会に参加して益々明るく、元気に暮らしていく予定です。

最後に、久しぶりに人様に向けての雑文でまとまりませんでしたでしたが、家族会の皆様は私共の支離滅裂な話も微笑んで聞いて下さいます。どうか読者の皆様も温かく見守りください。(潮騒家族会 K)

がーちゃんの 極私的懺悔録 「他人事だと思って…」

その
1

鏡に映った自分を 別人だと思い怯える中年男

【PRめいた著者プロフィール】

- ❖ アノニマスネーム「ガーゴイル」(36歳/男性)
- ❖ 出身：北関東の田舎町
- ❖ 前職：元詐欺師(自称)のような仕事&元介護福祉士
- ❖ 病歴：鬱病・発達障害・自閉症・
各種依存症(薬物・アルコール・女性・対人関係 ets)
- ❖ 好きなもの：宇宙戦艦ヤマト、昔のロックンロール
- ❖ 嫌いなもの：運動



連載に当たってのコメント～私がこの場所(潮騒JTC)に辿り着くまでの、ゆっくりとした自殺(結果的には死ねなかった…)の記録です。アクの強い文章なので、もしかしたら不愉快になる方もいるかもしれませんが。逆に「たはは…」と無邪気に笑える方もいるでしょう。依存症との向き合い方は人それぞれ。言い訳めいて響くかもしれませんが、私は回復に向けて自分を発信することに決めました。正直、著者である私としては「誰かのために」などとは、とても恐れ多くて言えません。作中の私は社会不適合者。今もそれは変わりません。ただ、辛抱強く読んでくださる方には、できるだけ「たはは…」をたくさん届けたいと思います。乞うご期待!それでは一発狂った文章でロックンロールをぶちかますぜ!! 4・6・4・9(ヨロシク)!!

朝、目醒めると寝汗がじっとり身体にまとわりついてた。二日酔いでしびれる頭を左右に振りながら、やっとの思いで洗面所にたどり着く。前かがみの体を起こすと、目の前に奇妙な人物がいる。

不潔この上ないパーマネントの髪に、一週間以上剃っていない無精髭、目鼻は赤黒く変色し、頬はこけ、瞳は黄色く濁っている。まるで時代劇に出てくる食い詰め浪人か、凶状持ちの風貌だ。この不気味な存在が、ただ薄ぼ

んやりと私の目の前に佇んでいる。

「こらあかん。こんな物騒なヤツが家におったらたまらん」。恐怖に駆られて後退りしながら、この珍妙な人物に出ていってもらおうとコミュニケーションを試みた。

不思議な事に私が怒りをあらわにすると、その人物も同じように私の目の前で怒っている…。次第に事態がのみこめてきた。私は洗面台の姿見の中にいる人物に、ひたすら話し掛けていのだ。そこにいるのは、他ならない自分自身だった。

◇ ◇ ◇

「ついに俺も狂ったか…。そう呟いた瞬間、重度のアルコール&薬物依存症の私は胃袋からせり上がってくる不快感を覚えた。「こらあかん!」。トイレに駆け込もうとするが間に合わず、昨夜食べた残骸を、しこたまフロアに吐き出した。

ゴボテン、シラタキ、キュウリ、ポテトサラダ、タン塩、ホワイトアスパラ、サラミ、イカの姿焼き、カラスミ、コンビーフ・タンドリーチキン…、「これって、本当に俺がぜんぶ自分で食べたものなのか…?」

昨夜、私は居酒屋を皮切りにキャバレークラブ、タイパブなどをはしごした。辛うじてそこまでの記憶はあるが、あとの事は覚えていない。とにかく私はホステス嬢らにモテまくり、有頂天になっていた。

でも、金にあかせた“天国”の記憶もそこまでだった。一夜明けたら、この無様で悲惨な醜態。結局のところ、あんな場所に繰り出した自分が悪いのだ。

「まあ、やっちゃったものをどうこう考えるよりも、これから先のことを考えねばならんな」「そう、まずは仕事だ!」。気を取り直した私は、鏡の中にいる自分を鼓舞した。

◇ ◇ ◇

私は介護士という仕事をしている。ヘルパーではなく介護福祉士という資格を生かしての仕事である。二十歳でこの資格を取ったが、介護で飯を食っていく気持ちになったのは三十歳を過ぎてからである。

それまでは人のいい高齢者を騙して、サプリメントや布団を売ったりする詐欺師まがいの仕事をしていた。セールストークに長けていたので、そこそこ売り上げは良かったが、詐欺師まがいのの方は警察が介入してくることで、いち早くバックレた。

そして、その後はとある県庁所在地にある眼鏡店に勤めた。この眼鏡店では人間関係の重圧に耐えきれず、なんと鬱病を発症。その後入院してしまい、半ばなし崩しの辞めてしまった。

今やっている介護の仕事だって、みんなは社会的に意義のある大事な仕事だというけれど、その実態はやたらとストレスが多く、仕事帰りのキャバクラ遊びがなければ、とてもやってられないキツイ仕事だ。

そんな訳で私は、収入より支出の方が多いボランティア稼業の中年男である。もっとも介護の仕事も酒とクスリでヨレてしまい、ここ半月ほどは会社から暇をもらって表向きは自宅療養の生活を送っている。病人のそぶりを見せているが、その実まったく治す気はない。

昨晚のように毎晩、飲み歩いては、キャバクラの姉ちゃんやタイパブの姉ちゃんに「オニイさん、酔っ払うだけよ」。何んて言われながらポッキーゲームをして遊んで(遊ばれて)いる状態なのだ。

◇ ◇ ◇

ここ最近では勤労意欲が衰退の一途を辿り、〆お酒のむ人花なら薔／今日も咲け(酒)咲け(酒)明日も咲け(酒)〆(都都逸)の、文字通り酔っ払い人生という具合。元の本阿弥、完全なアルコール依存症に戻ってしまったのである。

私自身32歳の時に医師から、「あなたは立派なアルコール依存症です。今後一切お酒をやめないと、げっすりするくらい惨めな生活をして、最後は苦しんで死にますよ。アハハ、おもしろ…」と脅された経験があります。

当時、多少なりともまだ人間やめたくなかった私は、一

念発起して断酒しました。毎日様々な自助会に参加。ミーティングを通して様々な人と出会い、分かち合いました。そして社会復帰したのです。

しかし「お酒をやめれば物事が良い方向に進みますよ」と助言してくれたドクターの話は、嘘っぱちでした。アドバイスに従って仕事に行けば、それこそどんどん“鈍臭い”だけのおっさんになってしまいました。

いくら頑張っても仕事も満足にできず、拳句には追い討ちを掛けるように家族が一人残らず病魔に魅入られ、私は独りぼっちになってしまったのです。

「もう知らん!勝手にしやがれ!呪われよ、偽善の立法学者パリサイ人たちよ!」(聖書)状態となった。そっからはもう、飲みまくりの人世である。

◇ ◇ ◇

で、私は今日も今日とて、散歩がてら近くのファミリーマートに向かい、例によってブラックニッカを買い、急いで戻っては自宅の部屋に引き籠り、連続飲酒するだけの日常を送っている。このように際限なく、今日と明日をダメにするのである。

さて…、と思ったところで気づけば午前9時。全うな人間なら朝飯をいただき、手前手水に禪を締め、可愛い女房から「あんた無事で行ってくんさいな」と、火打ち石でパチパチしてもらい、法被などを軽く羽織って「ちょっくら、行ってくらあ!」と大工道具を肩に担ぎ、経済活動を行っている時間である(時代劇の見過ぎかな?)。

ところが私と来たら、姿見に写った自身に絶望した拳句にタンドリーチキンなどを吐き戻し、あまつさえしばらく手につかなかった「龍が如く」というコンピューターゲームを起動させ、新宿歌舞伎町のチンピラをやり込めては小銭を稼ぐという暴挙を行っている。

午前九時にして、もう完全に出来上がっている状態。ゴミだらけの部屋で、床に落ちているイカの薫製などをしゃぶりながら、朝からレッドツエッペリンの「移民の歌」をがなっている、近所迷惑この上ない社会悪的な存在なのである。

しばらく前には、嫁さん(こんな私でも一度は結婚できたんですヨ)が離婚届を持って、「私はもっと有意義な人生を送りたい!」と言い残し、私の元を去っていった。それ以来、こんな調子で毎日過ごしている。

仕事も最初のうちは真面目に頑張るのだが、元々堪え性がないものだから一カ月も行く心地うんざりして辞めてしまう事の繰り返し。「意味ねーよ、仕事なんて」と周囲にうそぶきながら、ふて腐れている最低の“極道介護士”なのである。(以下次号に続く)



娘さんと3人で並んでいる姿には とても感動した

私は潮騒ジョブトレーニングセンターに入社して10カ月になります。初めて経験する職種だったため、最初は緊張で自分から話し掛ける事ができませんでしたが、センター長、職員、スタッフ(回復者カウンセラー)の皆さんが気さくに話し掛けてくれたため、すぐに馴染む事ができました。最近ではスタッフと冗談を言い合ったり、入寮者の皆さんに名前を覚えてもらえて話をする事が多くなりました。

そんななか、先のセンター長のお誕生会では受付を担当していたので各種の催し物をモニターでしか見られませんでした。いざ職員発表で舞台に立つ段になると、落ち着きがなかったかと思います。実際、私達職員の合わせ練習は2回のみで、あとは家での自主練習でした。正直、無事に踊り切れる自信がありませんでした。私達の前のエイサー隊を舞台袖から見ていましたが、完璧すぎる!この次に踊るとのかと思うと、緊張と不安しかありませんでした。出番の音楽が流れ、いざ舞台へ。頭の中は真っ白でしたが、間違いながらも何とか踊り切る事ができました。終わってみると、なんだかとても達成感!客席を見ると皆さんの温かい拍手で、とても気持ち良かったです。

それからは受付に戻り、女性ハウスや百寿の皆さんの素晴らしいステージを見ていました。センター長とルミさんの馴れ初めの再現、娘さん2人がセンター長に花束を渡し、3人で並んでいる姿にはとても感動しました。多忙で疲れている様子に見えていたセンター長も、この日は私が見た中で一番の笑顔だったと思います。施設のために休みなく飛び回り、夜には学校で勉強、とてもお疲れだと思心配ですが、これからも冗談を言って皆を笑顔にしてくれる、元気なセンター長でいてください。私も仕事を覚え頑張りたいと思います。(職員・関口)

挨拶で「私達は家族だ」と話していたのが 印象に残った

センター長の75歳バースデーイベントはエイサーの発表から始まりました。自分もエイサーメンバーなので、センター長をはじめ仲間達や家族会、支援者の皆さまに見てもらいました。4曲を演舞・披露しましたが、3曲目のミルクムナリでは立ち位置が変わって移動したら、なんと僕が学んでいる県立鹿島灘高校の先生方3人がいるではありませんか。緊張で少し体が固まったけれど、まあ80点の出来でそう悪くはなかったと思います。

さて、センター長、75歳ですね。いつも凛々しい姿で存在感を示してくれていますが、今のうちに公開の誕生会を開こうと考えたのは、年齢的に少し弱気な部分が出てきたのかなと推察しています。それだけに僕達は、これは目いっぱい楽しんで、感動して、泣いてもらわないと頑張りました。これからもみんなでセンター長を支えて行こうと思います。工夫を凝らした企画の随所に、みんなの熱い思いがにじみ出ていました。改めて結束を強めたようです。

センター長の謝辞挨拶の中で「私達は家族だ」と話していたのが印象に残っています。この大きな家族の中で自分の居場所を見つけ、自分の在りのままを受け入れてもらっている事を再認識できた、貴重なバースデーイベントでした。(エン)

めったに緊張しないのに本番前には ドキドキだった

センター長からのおねだりで、急きょ決まった誕生会。準備期間は約1か月でした。2月の初めにスリップしてしまった私は、この準備期間の忙しさのお陰で切り替えが出来たのが事実で、正直有難かったです。今回私はエイサーの演舞、るみの家の出し物のナレーション、そして司会…と大役を頂きました。私にできるのかという不安もありましたが、センター長や施設長に恩返しがあったのもあって、私なりに頑張りました。めったに緊張しない自分なのに、本番前ドキドキしている自分に驚きました。

エイサー、ビデオレター、余興と盛沢山でしたが、どれも温かくて、そでから見ていた私は感動しました。両親も参加していて夕食を共にすることができ、3カ月ぶりに、いろんな話をしました。私のスリップのことも、「またやり直そう」と言ってくれて、励みになりました。皆に愛されているセンター長って凄いなあ、と思いながら一日を終えました。素敵な一日を有難うございました。(めい)

職員研修で10年前の入院で お世話になったスタッフと再会



神奈川県横須賀市の独立行政法人国立病院機構「久里浜医療センター」で2月5～6日に開かれた依存症回復施設向けの職員研修会に参加させていただきました。実を言うと、ここは私が10年前に「アルコール使用障害」(最近ではアルコール依存症に替わって、このような呼び名だそうです!)で入院し、医師やケースワーカーなどの方の手を煩わせながら、3度目の(アルコール依存の精神科入院は通算5回)入院の後に都内の中間施設につながった、今に至る最初の出発点です。

今回の研修内容はアルコールのハームリダクションとも呼べる、節酒・減酒のプログラムが始まっていること。これはアルコール問題に関する法律が施行され、使用障害という病気であり、重症化する前に医療につなげること。また依存症は「否認の病」と言われ、断酒しきれないとされますが、その決心がつくまでの間様々な治療法を提供し、患者さんに寄り添い、病気に付き合うということをはじめからだそうです。その他の授業でも、今施設で起きている事と同じような事が治療の現場でも起きていることに気づかされました。そして研修会を通して横のつながりを持てたことも私にとっては財産です。

両日を通してのプログラムは、改めて自分に「今日一日を大事に生きることの大切さ」を教えてくれました。10年前と同じスタッフに顔を合わせることができましたが、今度は入院患者としてではなく職員研修という形で参加できたこと。こんなことは予想もしていませんでした。過ちの多い高慢な自分です。そんなことをすぐ忘れてしまう自分です。仲間のおかげで自分の病気を思い出すことができます。

良いことも悪いことも「今日一日」の中で精一杯やること、それが自分と神様との約束です。それ以上は神様の仕事です。今回久里浜の海辺はとても煌めいていました。神様は少しだけ正気を与えてくれたのかもしれませんが。そのことがとてもうれしかったです。少し恥ずかしいけれども、こう言わせてください。「命があって良かった」と。それもみんなのおかげです。感謝しています。 トム



日本は裁判によって 当事者を不正直にさせている

——前回、刑務所での話が尻切れでしたので、続けてください。

栗原 私の体験からすると、こと薬物事犯に限って言えば、刑務所では更生に向けた本人の可能性が限りなく奪われているように思います。隔離して罰を与える懲役刑が逆に作用して、家族も仕事も信用もすべて失い、ヤク中同士が「次は捕まらないようにうまくやろうぜ」となる。矯正施設が再犯を促す皮肉な結果を生んでいます。刑の一部執行猶予制度もいいですが、もっと欧米のように社会内で回復できる環境や仕組み（ダイバーション＝刑罰より治療と教育を優先させる考え方、刑務所に入れずに再起させる動き）を現実的に考えるべきだと思います。

近藤 何ていうか、刑務所に入ればそこで思考停止の状態になる。回復に繋がる要素がすべてストップされてしまうだろう。

——やはり日本は失敗を許さない社会ですね。一度つまずくと、立ち直りは難しい。欧米なら許すのに…。セレブが回復して社会復帰したら「よくぞ立ち直った」って評価され、それこそ以前にも増して一目置かれる存在となる。羨ましいですね。

近藤 ダルクでは5年が一応の目安と言ったけど、実際には5年たっても捕まる人いるじゃん。我々は5年もったということは評価に値すると考えるんだが、法律では単に再犯だろう。どんなにクリーンが長かろうが使って捕

まれば、それまでの努力は無視される。日本の司法はその繰り返し。でも賢い対応っていうのは、どうしたら5年間も使わずに済んだのか、そう考える方がいい研究材料になるじゃないですか。5年もったテクニックみたいなものを、みんなも習えばいい。それが使って捕まったら、さらに罪を上乘せする。それっておかしいと思う。何のための警察や検事なのか？決められた犯罪の、形式的な刑罰しか考えない。そんな逮捕事例を一日何十例も扱っているんだから、実にもったいない話だな。俺からすると本音では“勉強”していないんだな。

——再犯を防ぐというなら、そうしたデータの蓄積というのは必要不可欠ですね。

近藤 思うんだが、裁判で被告が「もう自分の力ではやめられません」と言えない社会はおかしいよ。どこの裁判も被告は「もうやりません」ばかり。日本は裁判によって当事者を不正直にさせている。クスリをやめることは正直になるのが大前提だろ。なのに、やめたくないのにやめさせ、と言わされるからプレッシャーになる。プレッシャーになると俺達は弱いからな。

ダルクがやっと学術的に 論じられる対象になった

栗原 私も一度だって裁判で正直になれたことはないですね。嘘を嘘で固めていく。裁判で自分に正直になれないのは、犯罪に対して正直にさせない裁判そのものの仕組みに問題がある。本音で自分に向き合うより、形式的な反省の言葉を重んじるような感じがね。

——やはり日本は本音よりも建て前を優先するダブルスタンダード社会だからでしょうか。その意味では自分に正直に向き合い、本音で自分を語ることで回復に向かうという依存症の世界の在り方は、歪んだ建て前優先社会への反面教師とはなりませんか？ ダルクの問題提起は行き詰まった閉塞社会への警鐘になりませんか？

栗原 それこそ近藤さんが30数年間、そう言い続けたことで少しずつメディアもダルクに目を向けるようになった訳ですよ。

近藤 ダースという学識団体があるだろう。薬物依存症の回復支援活動を目的に、主に大学の先生方が取り組むプロジェクトなんだが、発起人となった12人(=1ダース)の薬物依存の怒れる人たちの集まり、という意味も含んでいる。この団体のキックオフミーティングがあった。これからはアジアでもやっていこうと。今年はタイとバンコクかな？ 韓国や中国に行くのかな？ そこは未知数なんだが、ここが「日本では依存症の回復を声高にいくら言ってもだめ。だから外国から言わせよう」というアクティブな動きをしている。ここに来て、有名な人たちも集まってきた。円卓会議のように学者や法律家、まあ若手の優秀なメンバーが充実してきて、「これは日本も明るいぞ!」と思わせてくれる。そこにダルクの何人かが入っている。で、ダルクの周りにはサポーターの層ができてい

るしね。

——多分、依存症とかダルクとかが、やっと学術的に論じられる対象や関心事になってきたのでしょうかね。

近藤 そうだな、この研究分野に金を出し始めたっていうのは、日本の依存症の動きもまんざらではない。期待していいんじゃないか。現行の司法制度をハームリダクションに変えていこうとする大学教授レベルの人たちが集まった訳だからね。そのモデルがダルク。やっとダルクにスポットが当たる時代になったっていう感じだな。

——時間はかかったけど、時代の変化を感じますね。そうしたハイレベルの人間関係を構築できるのは、やはり近藤さんだからですよ。近藤さんだからこそ国のトップ人脈とも渡り合える。

近藤 いやいや相手側に物事の本質を見抜く、人を見る目があるということなんだろうと俺は思う。法務省の役人に聞いたら、アパリの理事を担ってくれた法務省の元矯正局長・保護局長だった横田尤孝(ともゆき)さんなんかは、歴代の局長の中ではとても信頼されていて、尊敬されていた人だと言うんだよ。ああ俺の目に狂いはなかったなと、そう思ったね。

アディクション村の通貨はダルクにしてほしい

栗原 全然レベルが違うけど、私は昔ダルクに繋がって暫くしてコンビニで今の妻であるルミに引っかかっちゃった(笑)。当人はアルコール依存症で、おまけに依存症の子供もいてね、つくづく自分は「埋め合わせ」人生だなんて思いますけど。まあ私は出たとこ勝負、結果オーライの人生ですからね。

——実際はセンター長から声を掛けただけでしょう。その後の二人三脚の潮騒人生に繋がる運命的な出会いですよ。ハイパーパワーがもたらした、とても羨ましい出会いだと思います。

近藤 警察庁のおじさん(横田さん)は俺が頼んだのではない。たまたま一緒にテレビに出ていて、彼はもちろんダルクとは正反対の立場にいた人だった。でもある時に北海道で講演を頼まれてね。その会場で、向こうから彼が歩いてくるんだけど、ボディガードがVの字になって随行している。「待たせてすまなかった!」と。驚いたね。その彼が「警察辞めてから退屈でどうしようもない」「今はジャイカにいたんだが、お金はいいから何か仕事とかない?」と言うんだよ。それでアパリの理事に就任してもらった。これも面白い出会いだろう。

——すいません。時間もアレなんで最後に近藤さんが打ち出している依存症への総合的な取り組みについて伺います。潮騒はアディクションビレッジ構想なんですけど、近藤さんはどのようなものを考えていますか、妄想も含めてありましたらお願いします。

近藤 やっぱ最後はアディクション村だな。そういうコミュニティをつくりたい。アディクション村の通貨は是非ダルクにしてほしいな。1ダルクを持たせてコンビニに行く。それこそダルク依存症共和国だよ。だからユタカにはもともとと暴れてもらって結構。停滞気味のダルクの殻を打ち破ってほしいな。

——近藤さん達の世代があのお世に行ってしまったら、ダルクは相当混乱するでしょうね？

近藤 大丈夫。それぞれ自立しているから。ダメなら消滅していいんだよ。また新たに生まれればいい。形かえればなんとでもなるし…。

栗原 潮騒の現実を見れば、ますますそのニーズは高まるばかりです。長嶋さんじゃないけど、「依存症は永久に不滅です」(笑)。

——そうですね、世の中変わっても依存症はなくなりません。フレキシブル(柔軟)に行きましょう。これで終わります。ありがとうございました。(司会進行・広報部)

受刑者からの手紙

隣の芝生は青く見えてしまうものだと自戒させられる

日一日と寒さも緩み、暖かさも身に染まる季節となり、あちらこちら梅の花も咲き、水戸市の偕楽園の梅も咲き始めた頃となりましたが、皆様には忙しい日々が続き、お変わりありませんか？ 私も残刑が残り1年となり、健康と回復への道へと邁進しておりますので、ご安心下さい。潮騒通信「どっこい生きてます」の1月号が、検閲を済み手元に届き拝見致しましたが、雑煮を配る写真が載っていましたが、今の私にはとても羨ましい写真ですネ。私にとって餅は好物で、正月外でも食べている程なので、とても羨ましいです。こちらでも餅は食べましたけれども、お年寄りが多い為に小さくしてあり、まるで餅だか何だか分からない感じでした(笑)。正月3が日はそういった餅が出ましたので食べましたが、余り満足感はありませんでした。それと好きなミカンも一人1個と、本当に情けない思いで、今年の正月を過ごしました。

同囚に依れば、「よその施設は正月位はもっと沢山貰える」そうです。まあ“隣の芝生は青く見える”ではありませんが、何でも他人の物は良く見えてしまうもののようなのです。以前は確かに余る程出ていたのでしょう。以前の刑務所を知っている人達は少な過ぎると思うのかも知れません。でも、私は思います。これが本来の姿で、「もっと食べたければ社会で食べればよいのでは無いか」「この気持ちをバネにして、刑務所に戻る事の無いように社会で頑張る事が大事な事なのではないか」と。それにしても、ここは本当に年寄りの方が多いです。この状況を、私達一人一人が考えなければいけないと思いますが、もっと国全体で「年寄りに行き場を」というか、ねぐらを何とか出来たら良いですね。センター長は本当に偉い人と私は心より尊敬しておりますので、これから先も頑張ってください。応援しております。私も前向きな気持ちで残りの期間を頑張ります。手紙の返事も楽しみにしています。

(東京都 K・Y)

今の自分には「懲役は楽勝」なんてとても言えない

前略 栗原センター長、シゲさん、お手紙有難う御座います。寒かった2月もようやく終わりです。この冬は本当に長く感じました。頂いたお手紙によると、シゲさんが潮騒のお世話になるようになってから2年7ヶ月が過ぎたとありましたが、クリーン期間2年7ヶ月は潮騒で生活されている人達の中では長い方なのですか？ 依存症からの回復はやはり簡単にはいかないのだとシゲさんの事からも分かります。人それぞれだとは思いますが、自分も取り敢えず1年頑張ってみようと思って居ます。それから先の事は正直想像も出来ないというのが今の自分の気持ちです。やはり最初の1年は大切でしょうから、とりあえずその事だけを今は考えています。

自分が現在の刑務所に来て2年が過ぎました。その間に出所していった人は何人もいますが、残念な事に1年もしない内に逆戻りして来た人が何人もいます。必ずと言って良い程、薬物絡みの事件の人達です。「この人は、もう戻って来る事は無いのだろうなあ…」なんて思っていた人が戻って来るのを見ると、やはり自分の力で薬を断ち切るのは、容易な事では無いのだと改めて思い知らされます…。何だか自分自身を見ている様で、人事ではなく笑って話せる事ではありません。

今回の懲役では本当に色々考える事があります。とにかく刑務所生活は2度と繰り返したくありません。こんなに惨めで情けない思いは絶対に最後にしたいと心から思っています。「懲役は楽勝」なんて、そんな強がり今の自分には言えません。依存症からの回復が、どれくらいの時間が掛かるのかは分かりませんが、潮騒の皆さんの力を借りて頑張りたい、と思っています。それではまたお便り致します。(福岡県 T・K)

今回の手紙の中に「隣の芝生の話」がありました。依存症の回復では他人との違い探しをいかにクリアできるかが鍵です。アディクト特有の自己中心的な思考から解放されるには、日々のミーティングで仲間の話に謙虚に耳を傾けることが不可欠であり、潮騒ではその下支えをしています。

毎回恵まれた工場への配役なのでとても感謝している

陽射しが春の訪れを告げる頃、如何お過ごしでしょうか。今日は一つ報告がありペンを執りました。それは、今まで「どこの刑務所に移送されるのか？」の分類中でしたが、今回また現在と同じこの刑務所で務める事になりました。また、新入訓練2週間を経て図書工場に配役されました。ここの刑務所は3度目になりますが、官炊、炊場、今回図書と、毎回恵まれた工場への配役なので、とても感謝しております。図書工場は私と他3名の計4名の工場で、良い雰囲気なので安心して居ます。部屋も独居ですので、自分の時間を持てます。何かを学習出来ますし、何よりも気を遣わなくて済みますから、それが一番嬉しいです。

潮騒の皆様はお元気にしていますでしょうか？ シゲさんからの手紙で元気で禁酒を続けている現実を知り、とても勇気づけられています。私も、今度こそ薬物を止められるよう頑張ります。まだ残刑2年ありますが、一日も早く潮騒へと帰れる様に真面目に務めたいと思います。最後になりますが、まだまだ朝夕は冷え込みますので、お身体には御留意、御自愛の上日々の生活をして下さい。今回はこの辺りで失礼致します。(茨城県 M・Y)

誰もいなかった“潮騒兄弟”が私を含め5人に

シゲさん、2年7カ月の間お酒を吞まず頑張っているとの事、シゲさんにはこれから先の未来も頑張ってもらいたいです。潮騒で依存症の先輩が頑張っている事を知る事は、出所後に入寮する私にとってとても励みになり、自分の事のように嬉しく思います。是非とも潮騒の仲間と一緒に依存症からの回復を目指したいです。ですからこれからも宜しくお願い致します。

私の方では去年3月頃には誰もいなかった“潮騒兄弟”が、現在では私を含め5人になりました。手紙では詳しい事は書けませんが、“同じ志を持つ潮騒の仲間”がいる事はとても心強く、何よりとても有難いです。皆、住む所、環境、仕事、それぞれ違いますが、潮騒に行き、環境を変えて新しい生き方をするという目標は皆同じです。今は所内で生活していますが、社会で生活しているシゲさんに負けないように腐らず日々努力して生活していきます。

話は変わりますが、シゲさん今年に入ってから潮騒通信が届いていません。私は潮騒通信が読みたいと思っていますので、宜しければ潮騒通信を送って頂ければ幸いです。今回の手紙はこの辺りで失礼します。(北海道 O・M)

薬物離脱教育が始まるのでしっかり自分と向き合う

お知らせです。ようやく本面接がOKとなりました。仮面から15週と長く感じましたが、何はともあれ委員面接終了です。「4月には社会へ戻れるだろう」と思っております。正直、喜びが大きいのですが、その半面で「それでは駄目だ!」と自問自答しながら生活している所です。社会へ戻れば必ず連絡させて頂きます。私も声が聞ける日を楽しみにしております。良き仲間としてこれからも宜しくお願い致します。今から残りの時間の中で色々と考えていきたいと思って居ます。捕まり3年が経ち、「今思う事は…」と考えたりもしています。親にも潮騒の事を話していますし、通信文も送っております。戻ってから話をする事になると思いますが、楽しみにしています。自分としっかりと向き合い決意したいと思います。間もなく週一で「薬物離脱教育」が始まります。4回だと聞いておりますので、しっかり自分の気持ちと向き合いたく思っています。(長崎県 F・T)

しおさい、俳壇

3月のお題

梅

選者 桐本石見

わが俳句人生の歩み・No.50

センター長 栗原 豊

ない物ねだりの「宝探し」を諦めファミレスでの“最後の一杯”に

「いい加減疲れたな。もう止めようや、これだけ探したのに見つからないんだから、運がなかったんだ。宝探しは終わりにしようぜ」。春3月とはいえ、夕方になると赤城おろしの冷たい空気が身に染みる。私は姪が運転する軽乗用車の助手席で、「もうギブアップ!」と両手を上げる仕草でおどけてみせた。「私も疲れた。これだけ探しても見つからないんだから、諦めるよりしょうがないわね」。姪も同じ心境だった。文字通り、ない物ねだりの「宝探し」だったのだろうか。共にヤク中の叔父と姪の二人が、あるかどうか分からない宝を探して歩く…。まるで安っぽいテレビドラマのシーンみたいだった。こうして私は同囚のイラン人受刑者から依頼された“シャブ探し”を諦めた。

私達二人はとりあえず、前橋市郊外ファミレスに入った。私は徒労感も手伝い、不覚にも自分が依存症であることをすっかり忘れていた。メニューに目もくれずにテーブルの呼び鈴を押した。席にやってきたウエートレスに「お姉さん、ビール!」と告げた。さすがに姪が慌てて厳しく諫めた。「だめだよ! その一杯が命取りになるんだから」。しかし、私は引かない。「一杯だけ、これが最後の一杯だよ」。姪を拝み倒して、グラスビール1杯を注文する。目の前に置かれたビールはみずみずしく、神々しくさえ思えた。水滴をグラスに走らせ、3年ぶりの一杯は極上の味だった。喜びとともに一口、二口とのみ、瞬く間にグラスは空になる。

だが、奇妙なことに私は、その味に何一つ具体的な印象を持つことはできなかった。喉ごしのよさはそれなりにあるし、アルコールが体内に吸収されていく、あの懐かしい感覚はあるものの、獄に繋がる前に感じた得も言われぬ心地良さではなかった。ヤク中やアル中なら誰でも経験することだが、アディクトにとって「最後の一杯」「最後の一発」が“最後”となることはまずない。ほとんどがスリップへの階段に繋がる。クスリの連続使用、アルコールの連続飲酒へと繋がるのが常道だ。私もそうなるのに、さほど時間はかからなかった。

もはや私の中には、この後に薬物・アルコール依存への治療施設(ダルク)に向かう気持ちなどすっかり失せていた。「できる限り、一人になって、早くこの場から逃れたい」その一心だった。しかし、さすがに姪は回復者としては先行く仲間だった。さっきの奇妙な行動に共鳴していた様子がすっかりなくなっていた。正気に戻り、私の目の前で今後の私にとって最善の道を熱心に説いている。でも、私はもはや少しも聞く耳を持てなかった。悲しい事に姪の話が左から右に抜けていった…。(次号に続く)

卓に置く

梅一輪の香りかな

特選句

あへ

梅は早春の百花に魁て咲く気品のある花。平安時代に中国から伝わり花を愛でた。服部嵐雪の「梅一輪一輪ほどの暖かさ」を思いますが、偕楽園など多くの木ごとの花を愛でるのも趣があります。簡素で実感の句です。

嬉しさと

寂しさ思ふ梅の花

特選句

あお

梅は早くは寒中から咲くので、その気概に勇気を貰う思いになります。また他の桃、桜、チューリップなどもその花の特徴に合った可憐さなどで和みますが、反面に寂しさと哀れや歴史を思うのも花です。梅には菅原道真、桜は城の戦など、また朝の花は勇気を、夕べの花は少し寂しいのも人の心です。

老木の

生きたる証梅一輪

特選句

ゆたか

日本で確認された梅の樹齢は四百年ぐらいいで、伊達政宗が朝鮮から持ち帰った木と言われる。また、「東風吹かば匂ひよこせよ梅の花主なきとて春な忘れそ」で名高い北天満宮の梅は、樹齢約三百五十年で接ぎ木で今に伝えられたとも言われる。老木は臥龍梅の形になるが、少しずつ咲く花も気概がある。人間の老いにも思いを重ねた句です。

今月の秀逸句

コート脱ぎ

小道を行くや

梅の花

しま

花は公園の花壇や桜並木の様に多く咲くのも美しいが、咲き始めの輪や葉隠れの一つも可憐で美しい。また花には女性を連想して多くの歌謡や和歌が詠われる。それらを思う艶冶を秘めた句です。

晴天や

梅の花咲く

小庭かな

くま

探梅と言って早咲きの梅を見に行くのや梅林を訪ねるのがありますが、小庭に咲く梅も質素で美しい。梅は鎌倉時代から食用にもなったが、桜より多く詩歌に詠われた。

紅梅や

娘の姿

ほんのりと

こば

花は、大方は女性に例えられるが、紅梅もまた娘を思う。ことに蕾の頃は可愛いし、朝靄の中で見る紅梅は艶冶でもある。「象潟や雨に西施が合歡の花」芭蕉の句なども思います。

梅林の

おちこち聞こゆ

鳥の声

ひろ

この近くの梅林は偕楽園が名高いが、千葉県香取市の阿玉台(あたまだい)貝塚などは人が少なく、天気の良い日は小鳥の囀りなども聞こえて楽しい。梅に鶯と言われるが、雀の声も可憐です。

幼な日に

梅の花見し

偕楽園

アツチャン

偕楽園は水戸藩主九代徳川斉昭により一八四二年頃に造園され、約三百町歩の広さで梅も今では三千本もあり、千波湖や好文亭なども名高い。私も何度か尋ねて懐かしい句です。

梅香る

夢にも香る

伊豆の旅

びーと

伊豆は暖かいので梅や椿の野生種も早咲きするし、熱海の梅園などは日本一早く咲くので名高い。昼に梅園を見て夜の夢にもその香りを思う。また河津桜や天城越えも見所。「伊豆は山中乙女の声の藪椿」が私にも懐かしい。

佳作

木洩れ日に三つ四つの梅の花	なん	梅咲くや偕楽園へ行きたいな	ぴのこ
梅の花実の生る頃の日をも待つ	あきら	梅の花見て酸っぱき実を思ふ	かよこ
卒業や梅の散りをも花吹雪	ゆうこ	紅白を交え梅咲く偕楽園	みく
梅の花雪のちらつく中に咲く	いるか	梅の花咲いて山路の春を待つ	ちゃこ
寒中に香り立ちたる梅の花	れいこ	夢枕仰ぐ幾千梅の花	あお
今朝はまた梅の綻ぶ日和かな	めい	お婆ちゃん笑顔で作る梅酒かな	シゲ
梅の花ひらひらと舞ふみ空	まこ	紅白の梅の香りの小道かな	モト
寒風に心ゆるぶよ梅の花	くま	梅一つ紅き蕾に春を知る	とむ
梅の花お結びもまた美味しける	ミニー	梅娘みな笑顔も華やかに	おの
庭隅にそっと咲きたる梅の花	ユーミン	筑波山靄立つ中の梅の花	ひろ
梅の花そっと顔だす晴天かな	しの	地元ゆえ梅見に行かず偕楽園	つか
寒き中早やも咲きたる梅の花	メーテル	後期てふ冠詞の齡ひ梅の花	ゆたか

どっこい

私も生きてます～我が回復記～「ブーちゃんの回復記」

第15回

彼女との泥沼の半同棲生活から抜けきれずに苦しむ

自助グループ(AA)メンバーの彼女と別れた寂しさから、僕は以前にも増してアルコールにのめり込み、医師への暴力で出入り禁止となった病院とは別の、都内の精神科病院でアルコール依存症の治療と回復に励むことになりました。当時、AAの仲間からは「いくら酔った勢いからとはいえ、婚姻届けを出したのはまずかったよ」と叱責されましたが、もはや後の祭りです。結局12日後には離婚届を出す羽目になりました。そうして2011年2月から5月まで、僕はこの病院のアルコール病棟でプログラムに専念しました。でも、所詮は寂しさを抱えた悲しいアディクトです。アル中同士の付き合いはやめようと決心するも寂しさを紛らわすために、彼女から掛かってくる電話を無視することができず、仲間や病院に分からないよう密かに会っていました。

そんな後ろめたさを抱えながらも、僕は病院での治療プログラムを終えて退院できました。でも、それも束の間、事件にこそなりませんでした。入院直前に酔った勢いで起こしたトラブル処理に追われたことで、僕はまたもや元の酷い状態に戻ってしまったのです。一方、彼女も治療プログラムを終えて群馬県内の専門病院を母親に付き添われて退院する途中で逃げ出し、僕の所に舞い戻って来ました。さすがに一緒に暮らしていることが親にばれたらまずいので、彼女も表向きは「友人のアパートに居候する」と繕いました。両親は薄々感づいていたようでしたがともかくも僕達二人は心のどこかにやましさを抱えた半同棲の生活を続けました。

しかし、アル中同士の男女が一つ屋根の下で暮らすのですから、破綻するのは目に見えています。約1年半にわたり飲酒をやめるやめない、仕事をするしないと揉めながら、二人ともスリップを繰り返しました。その間、僕はAAを避けながらも、本音では行きたい自分がいました。ある時は酔った勢いで参加し、制裁を加えられたりもしました。逆にそんな僕を助けてくれる数少ない仲間もいて、自分の思いを律できないもどかしい状態でした。その後、彼女の方は親への配慮から僕の近くにアパートを借りて一人暮らしを装い、実際には泥沼の半同棲生活が極限に達していました。

(次号に続く)

3月のバースデイ

イチロー



マイペースで!!

リューマ



31歳になりました。

タツヤ



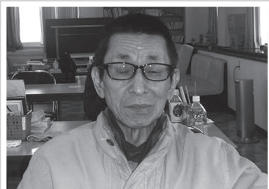
42歳になりました。

ケン



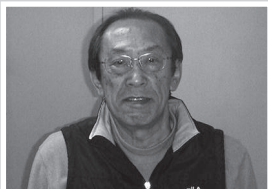
末永くよろしく

ゴロウ



まだ4年生

ヒロ



今日一日

ジョー



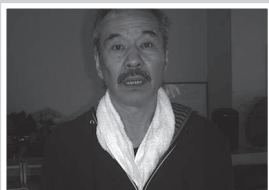
Just for today

ケンジ



やってやるぜ!

タダ



60歳になりました。

マル



がんばります。

コウジ



ゆっくりゆこう

あーちゃん



頑張ります!一発

3月の行事

- 3月8日 潮騒俳句会
 3月11・17日 秋元病院メッセージ
 3月23日 潮騒プロジェクト会議
 3月25日 潮騒家族会
 ミュージックケア・プログラム開始
 3月27日 ソフトボール交流(潮騒 VS 百寿)

4月の行事予定

- 4月5日 潮騒自主防災避難訓練
 4月7日 鹿島製鐵所さくらまつり
 (新日鐵住金)参加
 4月8、21日 秋元病院メッセージ
 4月12日 潮騒俳句会
 4月13日 潮騒プロジェクト会議
 4月14日 潮騒人間塾(栃木ダルクメッセージ)
 4月21日 潮騒大運動会
 (茨城県立白浜少年自然の家)
 4月29日 潮騒アディクションセミナー

献金・献品を頂いた方 (3月15日現在)

・内堀 高良 様 ・栗原 透 様 ・栗原 宏 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。
 本当にありがとうございました。

おかげさまで潮騒JTCは、回復のためのプログラムを
 実践することができておりますことをご報告いたします。

今後ともご支援くださいますよう、
 なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただいて
 おります。どうぞご理解のほどをお願いします。

編集後記という名の独り言

いったん依存症に陥った人の脳はもう二度と元の(健康な)状態には戻らない。その意味で依存症は一生治らない病気だ。でも回復はできる。当事者メッセージでよく耳にすることだが、では回復とはなんだろう? 素人判断ながらも薬物、アルコール、ギャンブルを止め続けている状態(いわゆるクリーン)の積み重ねが回復なのだろう。この回復を支えるのが仲間と自助グループ、12ステップの三要素。その根本には「霊的な世界」が横たわっている。僕には、この「霊的」とか「霊性」とかの言葉がとても厄介な難敵に思える。もちろん怪しげなおカルト的な意味ではなく、回復への重要なキーワードとして切り離せないことは納得できる。依存症の回復史が、多分にキリスト教の影響が背後にあるせいか、スピリチュアルという言葉が当事者やその周辺には普及している。それこそ信仰にも似た深い精神世界の目覚めとハイヤーパワー(自分を超越する存在、自分が信じる神)が関係しているのは疑いないのだが…。でも、神仏混合の“緩やかな”精神風土で育った僕の感覚からは、どうもスピリチュアルという表現はしっくりこない。うまく言えないが、僕には名状しがたい「何か」が回復に作用しているように思う。それはともかく、下手な理屈付けや解釈を拒絶するかのよう、回復者と呼ばれる人達が僕の目の前にいることは間違いない。前回も述べたように、潮騒ではその典型が栗原センター長とルミさんであり、他の何人かのスタッフ達の存在だろう。だとしても世をすねた生き方をしてきた僕は、どうしても霊性より魂や心とかの言葉の方がしっくりくる。そうした回復者とされる人達を見ていて思うのは、日本的な精神修養や厳しい修行、あるいは肉体を酷使しての苦行からはイメージできない、何とも不思議な精神世界のありように到達しているようなのだ。もしも医科学の世界において依存症を治す特効薬が開発されたとしたら、それは間違いなくノーベル賞に値する快挙だろう。そうした研究の果てに、いつの日か依存症が治る劇的な薬が登場することを夢想するが、それは無いものねだりと言うべきだろう。だって、そうした特効薬が開発され、治るとなれば間違いなくヤク中、アル中、ギャンブル中毒者が社会に蔓延し、今よりもっとさんだ社会になるに違いない。やはり依存症は、「神の世界」に属する病気であることで救われるのだと思う。何やら禅問答みたいになってしまったが、それが無い頭をひねって行き着いた結論です。(市)

潮騒通信 どっこい生きてます! 2018年3月

Contents

- P② 新たな仲間の学びのスタートと私の75歳祝賀に感謝
 P③ 潮騒家族会からのメッセージ
 P④ がーちゃんの極私的懺悔録
 その1〜鏡に映った自分を別人だと思い怯える中年男
 P⑥ 「センター長75歳お誕生会」感想文
 依存症者向け介護サービス「百寿」の事業も紹介
 P⑦ 職員研修で10年前の入院でお世話になったスタッフと再会
 P⑧ 近藤恒夫インタビュー 第9回[最終回]
 「最後はアディクション村のダルク依存症共和国づくり!」
 P⑩ 受刑者からの手紙
 P⑫ しおさい俳壇 3月のお題「梅」
 P⑭ どっこい私も生きてます「ブーちゃんの回復記」/ 3月のバースデイ
 P⑮ 行事予定 / 編集後記 / 献金・献品 / 目次



■ 編集・発行:

特定非営利活動法人
 潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
 〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
 〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
 TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒アディクションビレッジ会館
 (潮騒アディクション・ケアセンター)
 〒314-0031 茨城県鹿嶋市宮中 4-4-5
 TEL:0299-95-9991 FAX:0299-95-9992

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

